



Title	〈書評〉 稲場圭信/黒崎浩行編著 『叢書 宗教とソーシャル・キャピタル4 震災復興と宗教』
Author(s)	福田, 雄
Citation	宗教と社会貢献. 2013, 3(2), p. 79-84
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/26025
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

書評

稲場圭信／黒崎浩行編著

『叢書 宗教とソーシャル・キャピタル 4 震災復興と宗教』

明石書店、2013 年 4 月、A5 版、301 頁、2500 円＋税

福田 雄*

1. はじめに

本書は「宗教と社会」学会の共同研究プロジェクトとして 2006 年以降 6 年にわたって進められてきた成果の一つである。全四巻からなる叢書のうち、本書は最も直近の社会問題、すなわち 2011 年 3 月に発生した東日本大震災への応答として編まれている。

震災復興と宗教という、とりわけ 1995 年に発生した阪神淡路大震災以降、問われてきた主題を、ソーシャル・キャピタルという観点から分析することによって、どのような理論的・実践的地平が開かれるのであろうか。

総説において編著者のひとりである稲場圭信は問う。もし宗教のもつ利他主義が個人間あるいは集団間の紐帯を創出し、「思いやりによる支え合い行為」(p.21)を活性化させるとするならば、震災復興において宗教は他のセクターとは異なる独自のソーシャル・キャピタルの源泉として重要な役割を果たしたのではないだろうか。ソーシャル・キャピタルという概念を用いることで、宗教独自の「社会貢献」や「公益性」を描き出す、これが 11 本の論考と 3 本のコラムによって本書が明らかにしようとする問題である。この問題は当然ながら、他のセクターにおけるソーシャル・キャピタルとの共通性と差異のなかにこそ捉えられよう。以下でわれわれは本書が示した可能性と課題を見ていきたい。

2. 本書の内容と構成

<第 I 部「震災救援・復興における宗教者の支援活動」>

第 I 部は、ソーシャル・キャピタルという観点から、東日本大震災をめぐる仏教、神社神道、キリスト教、新宗教といった教団の果たした役割を検討するものである。

* 関西学院大学大学院社会学研究科・博士課程後期課程・yuta.fkd@gmail.com

第一章「仏教の活動」(藤森雄介)は、全日本仏教会の実施したアンケート調査にもとづき、震災後の仏教界の取り組みが紹介される。調査の結果、震災後の教団による組織的支援体制が評価される一方、刻一刻と変化する現場のニーズに対応する「直接支援団体」との連携や、これらの団体同士が連携するためのプラットフォームの構築が今後の課題としてあげられている。

第二章「神社神道の活動」(黒崎浩行)では、被災地の多彩な事例をあげながら、避難場所や物資提供などの緊急救援拠点、そして地域を越えた支援者の集う活動拠点としての神社の働きが記されている。鎮魂や復興祈願、祭りなどを通して「ふるさと」の再生に正面から向き合おうとする神社神道の課題と可能性が展望される。

第三章「キリスト教の活動」(高橋和義)は、国内外からの支援を受け進められた、カトリック教会、日本正教会、日本聖公会、プロテスタント諸教派におけるそれぞれの救援・支援活動が紹介される。高橋はキリスト教会の支援活動に共通する特徴として、行政組織との協同、教派教団を超えた協力体制をあげるとともに、支援活動を通じ神の愛を証しすることと被災者の心のケアのニーズとのあいだに生じる葛藤に言及している。

第四章「新宗教の活動」(金子昭)では、天理教・創価学会・金光教・立正佼成会、そして超宗派の連合体である新日本宗教団体連合会をあげてそれぞれの活動を紹介している。伝統宗教と比較した場合、新宗教の支援活動の特徴は、生者の「人心の救済」と「世直し」に焦点を当てる点にあり、また職業的宗教者だけでなく一般信者・会員の積極的関与がみとめられるという。

第Ⅰ部におけるコラム「宗教者として、そして一生活者としての東日本大震災支援」は浄土真宗の僧侶として釜ヶ崎のホームレス支援に携わってきた川浪剛によって、震災発生直後から被災地の支援活動に従事した自身の経験が述べられている。川浪は、宗教的な動機づけをもたない多くの人々が、宗教者に勝るとも劣らない情熱をもって支援活動に携わる姿をみるなかで、「宗教者の宗教者らしい」支援活動の意味を問い直したという。

<第Ⅱ部「連携・ボランティアの動き」>

第Ⅱ部は、宗教教団の枠組を越えたネットワークや連携のなかに、どの

ようなソーシャル・キャピタルが見いだされるのかを捉えようと試みるものである。

第五章「伝統的地域ネットワークと地域 SNS」（岡田真美子）は、震災以前から地域コミュニティを醸成してきた、「講」のネットワークに注目し、その伝統的ソフト・ソーシャル・キャピタルとしての働きを記録している。加えてハイテクツールとしての SNS が、伝統的地域ネットワークと組み合わせられることで可能となった「村つぎリレープロジェクト」という支援のあり方を紹介している。

第六章「宗教者と研究者の連携」（島藺進）は、宗教者と宗教研究者の連携した支援活動として、「宗教者災害救援マップ」や「宗教者災害支援連絡会」、「心の相談室」といった活動を紹介している。島藺は、震災を契機として宗教者と研究者の協同により発足したこれらの団体が、ともに公共空間に向けて情報発信することの意義を示すとともに、震災以前の平常時からの活動の重要性を強調する。

第七章「宗教者の支援活動調査」（稲場圭信）は、被災地における宗教研究者の関わり方の一つとして「アクション・リサーチ」という方法論を提起している。価値判断を伴う「自覚的な踏み込み」を認識しつつ、フィールドワークを行い、またそれを再帰的に評価するという姿勢を、自身の調査・支援活動を通して紹介している。

第八章「大学と市民運動—東日本大震災における大正大学と学外コミュニティの事例より」（星野壮・弓山達也）は、宗教系大学である大正大学とコミュニティスペース「大正さろん」の協力支援のプロセスが描き出されている。この事例から星野と弓山は、前者（＝「構造的隙間」）と後者（＝「閉鎖的ネットワーク」）のソーシャル・キャピタルが効果的に結びあわされることによって有効かつ円滑な支援が可能となったと評価している。

第Ⅱ部のコラム「仏教系大学による学生ボランティア活動の一例」（吉田叡禮）では、寺院徒弟の集まる花園大学の学生ボランティア活動が紹介される。そこでは、寺院同士のネットワークにもとづく迅速な支援活動、および地元住民と住職の信頼関係にもとづくきめ細やかな支援という宗門大学独自の強みが発揮された支援活動が展開されたという。

＜第Ⅲ部「宗教的ケア・復興への関わり」＞

第Ⅲ部では、これまで東日本大震災という事例をもとに検討してきた宗教のもつソーシャル・キャピタルの理論的可能性が、他の国内外の災害および歴史資料にみられる災禍との比較のもとに分析されている。

第九章「阪神・淡路大震災における心のケア」（岡尾将秀・渡邊太・三木英）は、「心のケア」概念が広まる契機となった阪神淡路大震災において、被災者の苦しみにも宗教がどのように応答したのかを事例調査や量的調査の知見から明らかにしている。調査からは、多くの人々が「布教・伝道」を忌避する一方、三割強が心のケアの担い手として宗教に期待するという、宗教者における「救援と救済のジレンマ」が浮かび上がった。他方で被災者は祭りや巡礼という儀礼行為を通じて、宗教者がいなくとも自らの心をケアしていたと指摘されている。

第十章「台湾における震災復興と宗教—仏教による取り組みを事例に」（村島健二）は、1999年に台湾で発生した九一一大地震後の支援活動において特筆すべき公共的役割を担った仏教団体、慈済基金会の事例を紹介している。村島によれば、これを可能とさせたのは、地方都市への国家支援体制の不備という戦後台湾社会の歴史的特質に求められるという。

第十一章「民俗芸能・芸術・聖地文化と再生」（鎌田東二）は、「神楽」など日本の様々な伝統的な民俗芸能が、そもそも共同体にとっての災いや危機に対応したものであるとの認識にもとづき、記紀神話や震災後に行われた祭礼の事例が検討されている。鎌田は、多数の神社が災害多発地域に鎮座するという事実を踏まえ、災いを乗り越える「生態智」が蓄積された「聖地」として神社を活かし、柔軟性と強度を備えた生き方を創造する必要性を説く。

第Ⅲ部のコラム「震災によって築かれた新たな絆—多くの境界を乗り越えて」（藤野陽平）は、キリスト者であると同時に研究者である藤野の「東日本大震災ルーテル教会救援 ルーテルとなりびと」におけるボランティア活動が報告されている。

3. 評価と課題

本書は、震災という非常時にあって発揮された宗教の公益性や社会貢献

の豊富な事例が紹介されている。多くの寺社が緊急の避難場所や、その後の復旧拠点として用いられたこと、また心のケアや生活支援を行ってきたことは、宗教の震災復興における役割の大きさを示している。

シリーズ全体の編著者でもある稲場が「他の巻に比べると…各章の統一感があまりない」(p.8)と述べ、また本書の主たる部分が多様な事例報告や調査記録によって構成されている点は、むしろ震災発生以降の混乱期における宗教のリアリティを、宗教研究者と宗教者が刊行物を通して世に問うた共同作業として積極的に評価されるべきであろう。

さらに本書は、震災直後における非常時の活動を報告するのみにとどまっていない。第一章で藤森が指摘する仏教各派の緊急支援体制の整備や、第五章で岡田が示す地域社会のネットワークは、平常時の宗教のあり方にこそ震災復興と宗教の関係を捉える視座が存在していることを示唆している。本書の示した事例をもとに、非常時から平常時へのプロセスに注目した研究が今後は期待されよう。

ただし総説で提示された宗教のもつソーシャル・キャピタルの理論的可能性が十分に論じられているかという点については課題を残していると評価せざるをえない。宗教がいかなる「公益」あるいは「社会貢献」をもたらしたかを問うにあたっては、非宗教的団体や「無宗教」とされる実践との比較のなかに明らかにされるべきであろう。それは本書第Ⅰ部のコラム(川浪)や、第九章(岡尾・渡邊・三木)で宗教や宗教者という枠組自体が問い直されていることから示唆されよう。非宗教的ネットワークにおけるソーシャル・キャピタルとしては、職業組合や趣味縁、社会福祉協議会やNPO団体、その他にも青年会議所などのアソシエーションを想定することができる。震災発生後、これらの集団にみられた「社会的信頼」や「互酬性の規範」は、宗教のみせたそれと比較してどのような共通点と差異をもつのであろうか。

この点については、本叢書第一巻「アジアの宗教とソーシャル・キャピタル」第二章における寺沢重法の論考によって一部検討されている。寺沢は、伝統仏教のもつソーシャル・キャピタルを、無宗教とされる人々のものと比較し、伝統仏教の信者が社会活動に参加しやすい傾向があることを量的調査によって明らかにしている。総説において稲場が提示した視座からの比較分析は、評者を含めた研究者によって今後引き受けられるべき課

題であるといえよう。

以上述べたとおり本書は、今後の研究にかんする知的刺激や将来予想される災害支援への実践的示唆に富む論文集として、宗教研究者ばかりでなく震災復興にかかわる多様な読者に開かれているといえよう。本書の探索的試みは、仮説の導出や実証、理論的精緻化に導かれる重要な学術的成果として捉えられる。とはいえ本書の真の評価は、震災発生から三年目以降（稲場のいうところのフェーズ5「復興・生活再建期」（p.25））においてこそ問われるものであることは言うまでもない。

参考文献

寺沢重法 2012 「現代日本における伝統仏教と社会活動への参加：全国調査データの計量分析」 櫻井義秀・濱田陽編『叢書 宗教とソーシャル・キャピタル 1 アジアの宗教とソーシャル・キャピタル』明石書店：60-92。